

厄介な隣国・中国共産党は中央委員会第6回全体会議（6中全会）で党創建100年を総括する「歴史決議」を採択しました。習近平は、建国の父である毛沢東、改革開放政策で経済成長の基礎を築いた鄧小平に並ぶ権威を手に入れました。

法律も政治も、習近平の「鶴の一声」で、変更されることが考えられます。説明なしに打ち出される中国の政策リスクに敏感にならざるをえません。

武漢コロナで世界中に災厄をまき散らし、国内的には不動産バブル・人権問題・未富先老・一帯一路の挫折等々、まさに内憂外患です。この習近平は、**国民の眼を外に向けさせるために最後は「台湾」奪取に向かうと考えるのが常識です。必然的に、日本は戦争に巻き込まれてしまいます。しかも近々に。**

そのことに「日本人」は、敏感に反応しました。それが、先の衆院選の結果です。

日経新聞の投票行動分析によると、40歳未満の層で自民党に投票した人は65%であり、261議席に大いに貢献したことになりました。マスメディアに踊らされるのは、老人と女性の様です。「**新聞**」は「**旧聞**」となったのです。

自民党が261議席を得て、維新が41、国民が11で、3分の2以上となり、ことごとく中国寄りの公明党32も一応与党ですから、「**憲法改正**」議論が活発化することになります。

元来、日本人が主体的に作ったものではない借り物（GHQが作った）の憲法を「不磨の大典」と有難がり（共産党や野党が特に）、そのため自国に誇りと自信が持てない日本人が大半になりました。

ようやく、アジアの国々を侵略した悪い国日本という自虐史観・亡国史観から脱却し、「普通の国・日本」「世界をリードする国・日本」「皇室を戴く国・日本」になれます。

「『千万人と雖も吾往かん』と言った孟子が同時に別面で『豈に綽々余裕有らざらんや』と言つて余裕というものを論じておりますが、**こういう乱世になればなるほど、われわれは余裕というものを持たなければならぬ。**余裕があつて初めて本当に物を考えることも出来る。

本当に行動を起こすことも出来るわけです」と、安岡正篤先生が説いておられます。余裕は、経済的余裕・精神的余裕・時間的余裕・肉体的余裕でしょう。

社長、乱世にこそ、日頃の勉強の成果・努力の成果が出る時です。

社員さんが、この社長に付いて来て良かった、と心底思つて下さる時です。「まさか」と同業者が慌てている時に、こちらは余裕を持って対処できます。

論語に曰く「**学ぶに如かざるなり**」と。

今月のポイント

『大変』は、大きく変る時!!

